

NHK取材班

11 教育

② 偏差値が
日本の未来を支配する

日本の条件

日本の条件

教育の偏差値が日本の未来を支配する

執筆者

まえがき

三井俊二(番組制作局・学校教育部)

プロローグ・5・(6)

曾我健(報道局・社会部)

1

高嶋光雪(NHKスペシャル番組部)

2

吉沢章喜(報道局・社会部)

3

宮系哲治(番組制作局・青少年幼児部)

4

西島透(NHKスペシャル番組部)

6

神林喬(番組制作局・学校教育部)

エピローグ

北山章之助(NHKスペシャル番組部)

日本の条件11 教育② 偏差値が日本の未来を支配する

昭和58年9月1日 第1刷発行

定価1,200円

著者 NHK取材班

© Shonosuke Kitayama 1983

発行者 藤根井 和夫

印刷・製本 凸版印刷

発行所 日本放送出版協会

〒150 東京都渋谷区宇田川町41-1

電話 (03) 464-7311

振替 東京 1-49701

ISBN4-14-008324-7 C0337 ¥1200E

Printed in Japan

怪物『偏差値』の実態を追う——まえがきにかえて

怪物『偏差値』の実態を追う——まえがきにかえて

恐るべき偏差値信仰

「お宅のお子さまは、偏差値がよくていらっしゃるから安心ですわね。どこでもお望みのところへ行けますものね」

「うちの子は、偏差値がねえー低くて……これでは、とてもあの高校は無理ですわ。先生もね、そうおっしゃるんですよ」

子を持つ母親同士のこんな会話は、いまや日本全国どこでも聞かれるものである。

私たち「日本の条件・教育、何が荒廃しているのか」のプロジェクト・チームでもその構成メンバーは中年が多く、それだけに中学生や高校生の子を持つ親として、偏差値とは決して無縁ではない。夜討ち、朝駆けで、教育現場を取材し、その現状を探り、問題を説明すべくジャーナリスト然として飛び回り、教育荒廃を嘆き憂え、日夜解決の糸口を模索しているものの、受験シーズンが近づくにつれて、子を持つスタッフの顔色も心なしか青ざめ、論調の歯切れもだんだん悪くなってきた。放送

現場では「偏差値が元凶だよ、偏差値が！」と威勢よく切りまくっていた者も、いったん家に戻ると、わが子に向かって、

「……それで、この科目、偏差値は一体、何点あるの、ふうん、そんなに悪いのか」

と思わずたずねてしまい、あわてて口を押さえる場面がどの記者やディレクターの家庭でも起こったりにしている。スタッフのひとりなどは子ども二人が、それぞれ高校と大学受験というダブルパンチにみまわれ、シンセサイザーを操作する合間に、思わずため息をついたりしている。その間、教育荒廃をイメージするテーマ音楽を作曲するのだから、実感あふれるすさまじい迫力のある名曲が生まれたのも、また当然のことであつた。また某チーフディレクターは浮かぬ顔で、東京の国立小児病院へ出かけ落ち着きがない。こっそり訳をたずねると、一人息子の高校受験の志望校がやっと決定したが、それから二、三日後に急に子どもの髪の毛が抜けて円形脱毛症になつてしまったという。あわてて精神科の医師の診断を仰ぐと、

「いやー、いま、円形脱毛症や、急に目がかすんで視野が狭くなったりする子が、受験シーズンになるとどっと増えるんです。その患者がつきつきと押しかけてきます。なに治療は簡単です。決めた志望校をよして、ワンランク下げた高校を受験するようにすればよいのです」

事実、悩めるディレクターのお子さんの病状も、志望校を変更したとたん嘘のようにきれいに治つてしまったとの報告があり、プロジェクトチームの全員、身につまされ笑うに笑えぬ話ではあつた。かくも、世の親を悩ませ、ノイローゼ気味にさせている受験地獄と教育過熱、その象徴ともいうべき怪物『偏差値』……。

私たち「日本の条件・教育、何が荒廃しているのか」の取材班の最初のターゲットは、まず、この

得体の知れないわれわれスタッフをも痛めつけている偏差値の実像を解明することであった。

偏差値ということばは知っていても、それが子どもたちの成績からどう実際にはじき出され、どのように進学や入試に具体的に使われていくのかは私たち一般の大人は、知っているようで、実は何ひとつよくわかっていない。

いわんや、この恐るべき魔力を持った『偏差値』なることばがいつから世に誕生し、そして今日のように大手を振って歩くにいたったのか、そしてそれはまた、なぜかくもパワーを持ち、その数値に世の親たちが一喜一憂する事態となってしまったのかは、これまで真向からまだ一度も解き明かされていない。

実態も定かでないこの『偏差値』が、教育現場や家庭をわがもの顔にのし歩いている姿は、考えてみれば実に不思議なことであった。

塾、小中高、予備校そして大学、さらには企業サイドと、記者やディレクターが各方面に飛び歩いて取材を始めるにつれ、この『偏差値』の、われわれの予測以上の横行ぶりが浮かび上がってきた。そのなかでひとつ寒気すら感じる切ない話がスタッフに報告された。ある塾主催による小学生の母子遠足の出発の折の話である。子どもたちはつぎつぎとバスに乗り込み、それぞれ席をとり座っていった。バスの定員きっちりの参加者であったが、そのなかで一組だけ間際になって駆けつけてきた母親と男の子がいた。当然バスのなかには二人がけの座席が空いていたが、男の子は、もじもじし、いつまでたってもその空席に座ろうとはせず、うろろと間の通路を歩き回っている。わが子の、のろい動きにかつときた母親が、

「早く座りなさいよ、どうしたの」

ときつい口調で叱るという光景が現出した。なかば泣きべそをかいている男の子が小さい声で呟いた声を聞いてその母親は絶句してしまったという。子どもたちの席取りには彼らだけのひとつのルールがあつて、それは塾で発表される偏差値の順位どおりに、おのずと席が決まっていくというものであり、このバスのなかでのたまたまあつた空席は、そのあまり成績のよくない子が、とても座れる順番のところではなかった。だからその子は、自分の偏差値番付による自分にふさわしい席を求めてうろついていったというものであつた。恐ろしくて、そして悲しい話である。たかが一片の数値にしか過ぎない『偏差値』が、子どもの序列を冷然ととりしきり、しかももつと慄然とするのは、子どもたち自身が、その数値だけで同じクラスの子の価値を互いに判別し合っているという事実であつた。

偏差値の驚くべき実態

日本の条件の第一部の放送タイトルは「偏差値が日本の未来を支配する」で、本書と題名が同じである。この題名だけ、ふと耳にしたり目にとると、なんとオーバーな！と思われる方もいるかも知れない。だがこれは何も誇大広告で人目につこうとの理由で生まれたものでは決してない。さまざまな調査や取材でおのずと決定したものであつた。

東京・代々木駅に近いある大手の予備校。絶えざる試験が繰り返されるなかで、生徒の個人別の偏差値がつぎつぎとコンピューターにインプットされていく。ボタンひとつ押せば、いまの彼の偏差値と、予備校が独自のノウハウで解析した大学のランクとの相関が、一瞬にしてブラウン管に提示される。画面の端に何やら暗号めいた文字がならぶ。㊦とか㊧とかである。説明をきくと、なるほどと思うが、㊦は当該生徒にとって、その受験は実力不相応の大学との意で「あこがれ大学」を意味し、ま

た④は実力相応校で合格可能を、そして⑤は「すべりどめ」をさしている。便利といえば、これほど便利なものはない。が、単なる暗記を主体とした学習の成果をペーパーテストで問い、その点数を偏差値に換算しただけのデータで、本人の将来コースに重大な影響をおよぼす大学が決定され、学部が選択されていく過程には、本人の性格や行動、そして人間性はいつき考慮されていない。

いま受験産業界は戦国の群雄割拠の時代をようやく終え、競争に破れた業者は消滅するか統合され、いくつかの大手のものに系列化されていく時を迎えている。それは受験産業がはじき出す偏差値と大学入試の難易度との相関データこそが売物であり、その正確な読みを裏づける情報量の多さに勝負がかかっているためである。この意味で受験産業は、情報産業そのものであり、列島規模でのたくさんデータのインプットができない中小の予備校や塾は、無念の涙をのんでつぶれていく状況にある。これら業界の内幕と、その活躍ぶりは本書第一章「大学入試という名の情報戦争」、高嶋ディレクターのルポに詳しい。

子を持つ親ならだれしも経験し悩むものに、中学三年生の二学期末から三学期初めにかけて数回にわたって行われる「三者面談」なるものがある。

これは、就職や高校進学など、その子の将来を決定するに際して教師・生徒本人・親の三者で交わされる話し合いを指す。

その際、親と子には、さまざまなデータをもとにした一種の勧告ともいうべき受験すべき高校名が教師側から伝えられるのが普通である。

各学年の中間や期末テストでの、その子の得点成績、そして、「模試」や「学力標準テスト」など呼びかたはさまざまであるが、要するに受験業者の実施する「業者テスト」の偏差値リストをもとに

して宣告にも似た提言が親と子に對してなされるのである。

たとえばその「三者面談」の現場の机の上に、業者の作成した「進学案内」なる偏差値と高校ランクとの相関一覧表がおかれていなかったとしても、いまの日本の中学教育では、まず一〇〇%近くの中学校で、それらの業者資料がひそかに最大の進路指導の指標として職員室で活用されている。

「そんな教師はお粗末だ」と一言のもとに責めるのは、いともたやすいことである。だが彼らの側にもそれ相応の言い分がある。どの親も、わが子を高校に、できれば普通高校に、しかも、より優れたランクの高いといわれる高校にあげたがる。しかも高校全入にも近い、きわめて高い進学率では、わが子が仮にも高校受験に失敗することになっては、世間に顔向けができない恥ずかしいこととされ、さらには行く手に学歴社会が待ちかまえている日本の社会構造のなかでは、その子にとっては中学浪人などは大変なマイナスイメージであり、十五歳の春の高校受験の時期に早くも人生の落後者になりかねず、また、人からもそう思われてしまう悲しい現実がある。そんな父母の熱い必死の願いのなかで、万一にも進路指導に失敗して、クラスのなかから中学浪人を出してしまつては担任教師としては校内外からの激しい非難にさらされようし、それこそ下手をすると教師失格との烙印も押されかねない。

確かに教育の荒廃は、家庭の親子関係やしつけ、そして学校の教師と教育制度、教育行政の責任者たる文部省や教育委員会、さらには大企業の有名大学卒の優先採用、学歴社会と、そのいづれにも責任の一端があり、いわゆる教育荒廃の「複合汚染図」をかたちづくっていることは1巻でも述べた。が、それにしても公教育の場での受験・進学者によるテストと偏差値割り出しの異常な活躍ぶりはすさまじいまでのものであった。

その恐るべき実態は第三章「業者テストが列島を席卷する」官系ディレクターの報告にあますところなく述べられているが、NHKの全国記者が各都道府県で取材拒否の壁厚きなかを突破して調べあげた業者テストの中学校への浸透ぶりは、目を覆わしめるほどのものであった。なぜかくも業者に中学校が狙われ、侵されているのか。それは大学入試において大手予備校が全国の情報を握ることによって偏差値利用の進学相談や決定に大きな力を振っているのと、規模こそ違え同様の理由によっている。

つまり、ある県内の高校のランクづけと難易度のはっきりしていないと、三者面談でどの高校を受験するように生徒や親を指導してよいのが、教師に明確にならないからであり、そのためには、県下共通のほとんどの高校受験生が受けてくれる業者テストが、かなり重要な比重をもってくるようになる。県や学校によっては、「生徒が受けてくれる」のはもちろんのこととして、「生徒に受けさせる」ことに汲汲とするにいたる。業者の発行するカラー刷りの立派な進学パンフレット一冊をひもとけば、県下のある高校を受験する生徒の偏差値がリストアップされている。もちろん業者テストにはその中学校も参加しているので進学案内に掲載されているデータには自校の生徒の偏差値も含まれているわけで、それだけに信頼度が高いこととなる。したがって大学受験における業者支配は日本列島を二分、三分する大規模なものとなりつつあるのに対して、高校進学では、県単位で統合されいくケースが多い。

こうしてさまざまな実態が日本の条件・取材スタッフによって浮き彫りにされていくなかで、中学現場での先生がたによる公教育の権利放棄とでもいうべき事例が数多くあるのには驚かされた。その一例をあげれば、たかだか一つの私企業にすぎない進学調査の会社の行う業者テストが、校外で他に

別に会場を設けて日曜日という休日に実施されるのならまだしも、平常の時間割のなかに組み込まれ、授業時間をさいて校内で実施され、その監督業務も教師が、クラス担任が平然とひきうけていることであつた。こうした校内テスト一〇〇%の県がいくつもあるのである。いくら業者テストに頼らざるをえない状況があるとはいへ、これでは、生徒ひとりひとりに目くばりし、その子の個性を引き出し、伸ばし育てていくという教育本来のあり方とは、あまりにも違った公教育である。これでは学力、しかも一片の数値にしかすぎない偏差値だけで、教師に「輪切り選別」されていく落ちこぼれ組はいったいどこに生きがいを見つけ、自分の将来に明るい見通しをもてるのだろうか。

偏差値を主体としたなかば強制にも近い高校への志望校決定は、二つの面で問題を起こしている。一つは、偏差値というだれもが実態のよくわからない怪物をフィルターにして選別され、落ちこぼれていく生徒が、ますます増えていく事態である。彼らは普通高校が無理なら、適性とはあまり関係なく商業高校、工業高校や農業高校をすすめられ、さらには定時制高校をわりふられていく。

世間が、そして私たち自身もが大変錯覚していることが一つある。それは大学や進学試験がピークに達する二月がもっとも学校が荒れる月であり、灰色の季節であると思っていることである。だが、NHKが独自に調査したデータによれば、校内暴力がもっとも吹き荒れるのは、この進路志望にとともなう輪切り選別と振り分けが実際に行われる秋であつて、二月ではないという事実である。「落ちこぼれ」と一言で決めつけられた生徒の、この時期の内心の苦悩が、如実にそこにはうかがえるといえよう。

そしていまひとつの問題は、この偏差値選別をどうにかくぐり抜け生き伸びた生徒たちの今後とその人間としての資質である。

高校ではその「普商工農」の種別にもよるが、高校入学後、わずか一、二学期だけ籍をおいただけで中途退学していく生徒数が異常に多い事実がある。ある県によっては毎年、その県の一校分に当たる一〇〇〇人を超す生徒がすぎつぎと高校からその姿を消していく。ゆゆしき事態である。

さらに大学へと進むと学生たちは、スチューデント・アパシー症候群ともいふべき病状に悩まされ、大学での勉強や生活面での無気力感や倦怠感に襲われる。大学で「何を学ぶか、何をするか」を明確に考えたうえで、そのためにこそ大学を志望するというのではなく、とにかく、少しでも世間一般に良いとされている大学に「入学すること」自体が目的であるから、彼らは入れた瞬間に、入ったその時から、大学入学の目標を失ってしまうこととなる。

ある有名国立大学の学生相談の係の人の話によれば、偏差値競争で心のいじけた学生たちが、おずおずときにくるその質問は、

「私は、幸いこの大学に入れましたが、何番目の成績で入れたんでしょうか。そしていま、ぼくはクラスのなかで、学年中で、いったい何番目の順位のところにいるのか是非とも教えて下さい。それでないと不安で、不安で」

というものが多く、あきれるという。偏差値育ちの生徒は、常に自分の番付と序列がないと不安がるというのだ。

そして卒業、就職、ここでも「偏差値人間」の根性のなさや執着心の欠けている面、そして何よりも企業にとっていちばん大切な創造性が乏しい点が非難され、取り沙汰されている。

こうしてみると、「偏差値が日本の未来を支配する」とのタイトルも、決して誇張などではない事態が、いま、日本列島中に出現し、偏差値に象徴される受験過熱が、日本の将来を支えることになる

いまの十代の個々の若者たちの心を蝕み、日本を危うくしつつあることが容易にご理解いただけるであらう。

高校も大学も偏差値で輪切り選別されている

大手受験産業の発刊している大学進路指導案内によれば、国公立大学はもちろん私立大学のすべてにわたって、何点ぐらいの偏差値の生徒が、どの学部を受験したかが詳細にデータ化されている。かりにA君としておこう。A君は東北のある町の高校を出た一年浪人である。数回にわたる業者テストで各科目別の偏差値もおのずと決定している。今年受験したのは仮に東北大学の法学部のほかに、東京の私立として早稲田大学と明治大学の各法学部も受けたとしてみよう。そのA君は、三つ受験したうちで、どこに合格し、どこに失敗したかが業者の追跡調査により明らかにされる。ただひとりではなく、それを日本列島規模で多数の受験生を相手にしてのデータ集計がなされ、個人名は伏せられて、数値がコンピューターで処理される。したがって、このA君を一例とする東北大・早大・明大と三つの大学の同時受験生の可否をたどれば、おのずと大学の学部別の難易度が割り出されることとなる。そしてそれは大学のランクがつけられることにもつながっていく。県単位での高校受験についても、中小の業者によって同様の軌跡が展開される。この状況のなかにこそ、いくつかの重要な問題点がひそんでいる。世間一般でとかく非難されがちなことであるが、中学教師が、高校進学希望の生徒ひとりひとりを、三者面談によって輪切り選別しているとよく言われている。もちろん、これもある程度事実であるが、実は、偏差値をもとにした高校・大学への進路指導が、受験する当該生徒だけではなく、その受験生を入学させる高校や大学自体をも輪切りに行っている事実である。偏差値が高校や

大学の難易度を判別し、そのことによって格づけが行われることとなるのだ。

「あそこは三流校。こんな低い生徒が受験し合格しています」こうしたデータが受験案内、進路指導書でいったん公にされるとつぎの二通りの考え方や事象が親子そして世間に広まる。

「あそこは三流校だ。うちの子は偏差値が少しは良いから、あんな学校を受験するのはやめよう。あそこはクズ学校だし……」

「あそこは、こんな低い偏差値でも入れるようだ。これでできる悪いうちの子も、まあなんとか高卒という資格だけはもらえるぞ」

悲劇はここに始まる。学力成績の優秀な子は当然この高校を避け、いわゆる成績の悪い子だけが吹きだまりのように集まってくることとなる。いったん三流校との烙印が押されると、以後その学校がどんなにがんばっても、もはや失地回復の余地がなく、いわば学校自体が「落ちこぼれ」ていくのである。

だが、選別され、格づけされてしまう高校や大学に同情ばかりもしてはいられない。

彼らの側にも問題がある。高校や大学の実施している現行の入試方法が、偏差値をもとにした学力で判断しているかぎりこの事態は続く。

高校や大学が勇気をもって単純な学力一辺倒の学力テストを避ければ、「輪切り」されることや「偏差値支配」からは脱することができると思われる。

今年の春、信州大学経済学部では、複数の受験科目のうち、その一、二の科目でたとえ零点をとったとしても、他の科目でずば抜けた成績をあげれば、そんな生徒も喜んで入学させますと発表し世間をあっと言わせている。これなども「偏差値」からの脱出の好例であろう。事実、実際の可否発表で

も、一人、一科目に零点を出した豪傑を合格させ、人々の期待に応えている。

日本の条件・取材班の海外チームは、アメリカのハーバード大学の入試制度を徹底的に追い、日本の入試制度へのひとつの示唆として、番組でも紹介した。詳細は本書第四章「ケネディはなぜハーバードに合格したか」に譲るが、ひと言だけ書き記せば、ハーバード大学ではペーパーテストはなしで、その受験生の高校時代の行動や特性を探るとともに本人の人物を多方面から判断して、可否を決定していることである。その生徒の高校生活で、彼もしくは彼女が、いちばん活躍したものは何か、運動部のキャプテンとしてリーダー性を発揮したのか、弁論大会やボランティア活動の実績は、そして人物は「ユーモアがあるか」「信頼度は」「人間としての他者への思いやりは……」といった日本ではおよそ考えられない手間をかけて、受験生ひとりひとりを調査判別していくのである。これでは、日本式の「偏差値」が入り込むすきはまったくどこにもない。

日本、この特殊な教育風土

私たちは、日本の教育の問題点を探り、荒廃の原因を明らかにするため、アメリカ、イギリス、フランス、東西ドイツ、スウェーデンなどを取材した。

教育荒廃や校内暴力は先進工業諸国に共通の悩みごとではあったが、そのよって来たる原因は単に経済的なことだけではもちろんなく、それぞれ固有の宗教や文化、歴史と密接につながっていて一概に日本との比較は危険である。しかし、各国での教育現場や行政当局そして親子の意見をはば広く調査したり、インタビュしたうえの実感であるが、どうやら教育荒廃は、アメリカが世界で最重症国であるとの、われわれ日本人がこれまで考えていたこととは異なり、事実日本もいまや、世界で最

悪の事態を迎えているとの印象を強くした。これは私一人にとどまらず、海外取材班全員の共通の、悲しい見解であった。日本の中学校での生徒による教師への暴力事件の多さは、その氷山の一角である。偏差値なることばと観念が教育現場に入り込み、生徒と親を、そして学校を牛耳っている国は日本以外にどこにもない。取材で出会ったある西欧の、日本の教育界に詳しい学者はいう。

「日本人は二度、生を受ける。一回はこの世に誕生したとき、そして二回目は大学に合格したときである。その日の体調のいかんにかかわらず、あるたった一日の、それもペーパーテストの結果だけで、その子の一生が、将来が決まってしまう国、それが日本の教育だ」と。

この分析は痛烈である。
知育、徳育、体育、この三つのどれかが偏重されすぎると深刻な問題が起こり、時として国を滅ぼすこととなる。

紀元前、あの隆盛を誇ったギリシャのスパルタは、体育偏重に走り、武力をつけることだけを教育の最眼目とし、人々に「考えること」を禁じて、やがて滅んだといわれている。

いまの日本の、この偏差値を錦の御旗とした学力偏重の教育の行きつくところ、スパルタの二の舞にならないと、だれが保証できようか。

思えば一九六〇年代のアメリカ映画「暴力教室」の公開は、はじけ、飛び散る強烈なロック・サウンドとともに、私たちにある種の衝撃を与えたものの、しょせんは遠い外国の話で、絵空事であった。それがいま、日本各地の教室で現実となっているのである。

同じくアメリカ映画「処刑教室」の今回の日本公開は、もはや他人事ではない感じを抱かせる。日本の教室が、教育が、そして家庭が、不幸な血で彩られないことを祈るのみである。